

WHAT

イギリス・マンチェスター大学

文教育学部 人文科学科
地理学コース 3年
中井 瞳

2012年8月。真夏にも関わらず、スーツケースに入りきれない厚手のコートを羽織り、成田空港の出国ロビーを歩く私の姿がありました。はじめての一人暮らし、語学研修で訪れて以来、1年ぶりのマンチェスターへ向かう私の心の中は、不安よりも期待で一杯でした。絶対に他の人には負けないぞ、という根拠のない自信に満ちあふれていました。それから訪れる挫折の山などまったく知らずに。ずいぶんお気楽だったと今となっては思います。

今となっては全てが良き思い出ですが、改めて振り返ると、大小様々、1年を通して悩んでない時はなかったと言えるほど、「悩みに悩んだ1年」でした。

まず大きく落ち込んだのは、渡航後3ヶ月経った頃。自分の英語力が中々つかず、また、イギリス人の友人もできず、とてももどかしく感じていました。そういった状況の中、先生に泊まりがけのフィールドワークに参加させて欲しいと懇願し、参加を許可してもらった「islands」という講座がありました。生徒はイギリス人7人と私一人の計8人。彼らは決して拒否はしていないけれど、積極的に迎え入れてくれる感じでもなし。話かけても、私の英語力不足も相まって、会話は続かない。そんな状態のまま、7泊8日のフィールドワークの日を迎えました。とにかく不安で一杯でした。兎に角、きっかけを見つけては話しに加わってみました。また、いつでもみんなの視野の中に入る様に努めました。すると、少しずつ私を誘ってくれる様になりました。さらに、何気ない会話の中の次の一言が私の第一関門を完全に破ってくれました。

「瞳って勇気があるよね！」続いて、「瞳は、自分では気づいてないだろうけれど、授業が始ま

ってから2ヶ月たった頃から急速に英語の力がついてきているよ。」とも教えてくれ、「もっと積極的に話せば、帰る頃にはペラペラになれるから、私達が話相手になるよ。」と言ってくれたのです。この一言がその後の私の行動を大きく変えてくれたのです。つまり、英語が通じる通じないの問題でなく、それ以前に相手に自ら進んで意志表示をしていかななくてはいけないのだと気付かされた私は、怖いもの知らずに友達の輪の中に飛び込んで行ける様になりました。

このように、様々な苦難がありながらも、1年を乗り越えてこられたのは、周囲の温かい支えがあったからだと思います。一緒に勉強し、一緒にご飯を食べ、映画を見ながらのんびりと過ごすこともあれば、熱い議論を交わすこともありました。それだけではありません、大学に行けばそこにはグループワークを共にする友達がいるほか、研究室にわざわざ呼んでくれて相談に乗ってくださる先生方がいました。マンチェスター大学で過ごした1年を一言で言い表すとすれば、「最高に恵まれた環境で過ごせた、かけがえのない瞬間だった」と言えるでしょう。

